真っ赤に染めて

峰春秋人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真っ赤に染めて

【Nコード】

N8956N

【作者名】

峰春秋人

【あらすじ】

妹を殺した犯人を突き止めようとする青年。

それを助けるのは葬儀屋と一人の真っ赤な死神。

死神と契約を結ぶ青年。

意味ありげな【妹への罪滅ぼし】。

真っ赤な青年を染め上げる死神。

犯人は誰？

契約（前書き）

意味ありげな言葉だけど W W

契約

「今日のラッキーカラーは赤DEATH」

僕の妹が昨日の夜そんなことをいう赤い男を見た途端に死んだと近所から通報があった。

いつものように夜になって起きたかと思うと町へとかりだす妹・アンリーヌのことを僕はいつもうつつとうしげにしていた。人にいやがらせをしてはケラケラと笑っている奴だったから。

けど、怪我や熱が出ればすぐに心配をしてそばで看病をしてくれた。怨まれるような奴でもなければ、怨む奴でもなかった。

葬儀屋に運ばれてアンリーヌが青年の目の前で棺に入れられた。

「何か？ヒツヒツ。」

ケラケラと笑いながら葬儀屋は小首をかしげる。
小さな声で青年はつぶやく。

「なあ、アンダーテイカー葬儀屋。」

「どうしましたか？・・・管理人さん。」

「その呼び方はやめて頂きたい。僕は管理人ではなくて。」

青年は話そうと思ったことを後回しにいて首元のネクタイを締め直してはつきりとした口調で言う。

「管理人じゃなくてレナータ・アルベルトです。」

「そうでしたね。」

奇妙な笑い声をあげて葬儀屋はアンリーヌの顔に化粧を施し始めた。妹の寝顔を見ると鳥の声が聞こえてきそう。青年・レナータは耳をふさいだ。

葬儀屋はそれを知ってレナータの手を耳から引きはずした。

「何をするきですか？葬儀屋。」

「いえ、邪魔だったんで。」

「・・・たく。」

「で、話したいことはなんだったんですか？」

葬儀屋の言葉にレナータは思い出して近くの棺桶に腰をついて話した。

「お前は、妹を殺した犯人を知っているのでしょうか？」

口の端がゆっくりと上がる。

どこか嬉しそう。なぞぶりで葬儀屋はレナータの周りをくるくると回る。

ピタッと動きを止めると肩に手を置いて話します。

「知ってますよ。それは真っ赤なものに身を包んだ奴で・・・人間じゃないもの。」

「人間じゃない？」

「そう。面白いでしょ？」

「知り合いですか？」

「うん。」

軽い口調で淡々としゃべる葬儀屋を疑いもせずにレナータはその話を受け入れた。

手作りの骨クツキーを頬張りながらアンリーヌの化粧も済ませます。

「そいつに会わせろ。」

「会ってどうするの？仇でもうつ？」

「・・・殺せないのならば、話しあうまでです。」

「話なんて聞かないよ。きつとね。」

ビーカーに入った得体のしれない飲み物を口に流し込みカウンターに肘をつく。

レナータはしばらく葬儀屋を見つめてから手をポンツと叩いた。

「お前と一緒に来ればいいんだ。」

「え？」

驚きの声を上げる葬儀屋を無視してレナータは話を進めた。

「知り合いなのでしょう？お前の話なら聞いてくれると思いますよ。」

「

「・・・わかりました。」

「それじゃ、今日の夜また訪ねます。」

「はい。」

アンリーヌの白い肌を恋しげにレナータは撫でると冷たい頬へと温かいキスをして店をから姿を消した。そして、棺には蓋がされたしまった。

町へと繰り出したレナータは悲しげな瞳でおもちゃ屋の前で足を止めた。

店の看板には「ファントム社」を現す門が刻まれており自然に扉に手がかかる。

棚に大中小さまざまの大きさのビターラビットが並べられている。

「・・・アンリーヌ。」

亡き妹の名を口にしてレナータは一つのビターラビットに触れた。柔らかいさわり心地の生地に、抱き心地のよい感触。まるで・・・まるで・・・アンリーヌを抱きしめているようだ。

「アンリーヌ。お前の好きなビターラビットを買ってやるから帰ってこい。」

ぎゅつと人形を抱きしめてレナータは目をギュツと瞑る。その時、

「あ・・・商品を抱きしめないで頂けますか？」

一人の店員老人に話しかけられて思わず我に返るレナータは顔を真っ赤にして思わず、

「ッ・・・こ・・・これを頂こう。」

袋に入るビターラビットを見つめて何故あんなことをいったのかと考えるレナータはぼーっとしていた。

馬車に揺られながら屋敷へ向かう。

が、急に馬車が止まって思わずビターラビットを落とす。

何事かとビターラビットを拾いあげた瞬間馬車のドアが開いた。

髭面の老けた男と、力持ちそうな若い男が現れたかと思うとレナータの口をふさぎ馬車からずりおろした。ビターラビットは悲しく馬

車の外に落ちる。

「おい！早くそいつを車に乗せる。オークションに間に合わないぞ！」

もがくレナータを見ながら周りの男たちは何かを話し始める。

「オークション」と言葉が出るといことはこいつらは人さらいだとわかる。

この時代の英国では人身売買が続いておりそのことを「オークション」ともいう。

レナータはもがいてどうにか拘束を解こうとしたが大人の男の力には負けてしまうのは一目瞭然だ。

「大人しくしろ！」

と男の平手打ちがレナータの首に入ろうとした時、

「・・・つぐ！！！」

男のほうがつめき声をあげて倒れた。

その後ろにいたのは黒い衣装に身を包んだ・・・。

「助ける！葬儀屋。」

「はぐい。」

「なんだこいつ？」

「失礼。」

「ん？・・・ぐはあ！？」

男たちは次々に倒れ込んでいきレナータは拘束を外される。手首をさすりながらキツとした目つきで葬儀屋を睨む。

「何故木陰にいて助けようとしなかったのです？」
「管理人さんは自分で拘束を解けるかな〜ってね。」

ふざけた表情で葬儀屋はいうとレナータの手を引いて馬車に乗せる。
地面に落ちたビターラビットの土を払い優しく隣に乗せる。
自分は運転席へと乗って馬を走らせる。

「何故僕を連れ戻したりしたんですか？」

「情報料をもらっていなかったのですね。」

「・・・あとばら・・・駄目です。」・・・はあ。」

大きなため息をついてレナータは再びあの店へと戻った。
葬儀屋はまだ楽しそうに笑っている。

何を思い出してるのやら・・・。

「小生は君の笑いが二番目に好きだ。」

「一番目は誰なんですか？」

ネクタイを締め直して、近くに置いておいた上着を着直すレナータ
に葬儀屋はにやりと思いつき笑いを浮かべながら答えを返す。

「ファントム社当主であるシエル・ファントムハイヴの執事。」

「・・・はあ？」

「彼のくれる笑いは最高だよ。ヒッヒッヒ。」

レナータは手袋をはめる手を止めて少し口元をゆるめて小さく聞か
えない程度につぶやく。

「執事がコイツに最高の笑い……か。面白い。」
「……ヒツヒツヒ。」

聞こえたのか、聞こえてないのかわからないけど葬儀屋は笑うとまた骨型クツキーのつぼを開ける。

棺に座るレナータはさっき買ったばかりのビターラビットを取り出して優しく抱きしめる。

葬儀屋が奇妙な笑いを上げながらこちらを見てくるのも無視して静かに、静かに柔らかな感触を肌で感じていた。

手元にあったペンを懐から出した便せんに滑らせる。

- 我が妹、アンリーヌ。

サヨナラもできずに別れたこと……僕にはとても心に残る。

だから、お前の大好きなこの兎に僕の思いを伝えてアンリーヌ……

・ お前と一緒に燃やす。

あの世でも僕を見守っていてくれるかい？

我が妹、アンリーヌ。

安らかな永遠の眠りをお前に捧げよう。

苦痛も、悩みも、何もかも忘れて永遠の眠りにつけ。

目覚めたそこにあるものはお前の望んだものだろうが目を覚ます

な。絶対に……。

長々しい手紙を、恥ずかしい手紙を小さく折るとビターラビットのリボンに巻きつけた。

そして、もう一回ぎゅっと抱きしめると葬儀屋に差し出した。

「妹と一緒に燃やしてくれ。」

「いいのかい？」

「ああ。かまわない。」

「りよ〜か〜い。」

そういつと葬儀屋はもう一度アンリーヌの入っていた棺の蓋をあけてそこにビターラビットを添えた。もう二度と見ることはない自分の妹の顔を見てレナータは悲しげな顔をした。

が、目をそらしてキリツとした元の態度に戻って立ち上がる。

「葬儀屋。行くぞ。」

先にすたすと歩いてドアを開ける。

葬儀屋は笑いながら棺を閉めてあとを追った。

静まりかえった港でレナータと葬儀屋はレンガ造りの建物に身をひそめて赤い男を待った。

潮風の香りが鼻につき、波の音が耳に染み付く。

「葬儀屋まだなのか？」

「。。。。」

「葬儀屋？」

いつものケラケラと笑う葬儀屋の顔はなく、真剣な目つきになっているのを見てレナータは首をかしげる。その時、

「キヤーー!!！」

と声が聞こえたと思うと上から血にまみれた女の死体が落ちてきた。驚きの声も出ないほど状況がわからなくて立っていると、葬儀屋が肩に手を置いた。

「小生から離れないでください。」

いつもとは違う声色に自然にうなずいていた。

女が落ちてきたビルを見上げると月を隠すように立つ赤い人が風になびかれて立っている。

「あーら？もしかして・・・葬儀屋？」

赤い男の声は女のようにで・・・でも男のもので。
正直言つて・・・。

「オカマ？」

「あら？なんかイラってくるセリフが聞こえたような・・・。」

のんきなことを言いながらビルから降りてくる・・・落ちてくる赤い男。

葬儀屋はいつも通りの笑顔を浮かべながら笑った。

「ヒツヒツ・・・小生を覚えていてくれたのかい？」

「覚えてるも何も印象強いわよ。ったく・・・。」

レナータは驚きを隠せない様子で二人を見ている。

でも、葬儀屋はまだレナータの肩から手を離さずにいる。

「で、この子どちらさま？」

「・・・管理人さん。」

「おい！このオカマ野郎・・・僕の妹を殺したこと後悔させてやる
！」

「・・・？」

「昨日殺した女の子だ！栗色の僕に似た瞳の！」

首をかしげる赤い男にレナータは怒鳴り散らす。

「あー昨日のあの子。私じゃないわよ。殺したのわね。」

「はあ？」

「私があんなに人が見てるところで殺すはずないじゃない。」

「……。」

「管理人さん。とにかく、一旦帰りましょう。」

ゆっくりと背中を押されたレナータはゆっくりと歩き出した。けれども、悲しげな顔でどこか遠くを見て。

「私犯人知ってるわよ。」

いきなりの赤い男の言葉。

レナータの足が止まりゆっくりと赤い音に向き直る。

「……知ってる？」

「確実ってわけじゃないけど見当はついてるわ。」

「教えてくれ！」

葬儀屋から離れてレナータは赤い男に食ってかかった。

想像以上の力強さに思わず赤い男も驚く。

「僕は……妹のためにこれくらいしかしてやれない。頼む。」

ギョツと赤い男の上着をつかんでそのままぐつと涙をこらえて赤い男のメガネの奥を見つめた。

冷たいその視線を浴びてもひるみはしないレナータ。

ゆっくりと上着をつかんだ手の上に手をかぶせて赤い男は言った。

「優しいお兄さんのね。」

葬儀屋は思わず驚いてその場に立ちつくしてしまつ。

(初めてだね・・・彼のあんな笑顔は・・・)

「手伝ってくれるのか？」

「でも、条件があるわ。」

「え？」

「私と契約するの。」

「け・・・契約？」

葬儀屋の髪の下に隠れた瞳が開かれる。

気付いたときには二人の間に割つて入っていた。

「・・・。」

「どうしたの葬儀屋？」

「・・・契約は駄目ですよ。管理人さん。彼と契約したらどうなるかわかっているでしょう？」

「葬儀屋。これは僕の罪滅ぼしだ。妹へのね。」

「・・・。」

優しげに笑うレナータをみて葬儀屋は後ろに下がった。

「僕はレナータ・アルベルト。」

「私はグレル・サトクリフよ。これでも執事DEATH」

「契約するよ・・・。」

「一つ聞くけど後戻りはできないわよ。」

「・・・ああ。」

「それじゃ・・・。」

そういつてグレルはレナータの肩をつかんでゆっくりと自分に生えた犬歯を首へと向けた。
体を震わせるレナータを葬儀屋はじつと見守ることしかできなかった。

あと、一ミリというところまでグレルの口が迫る。
目をギュッと瞑った。

「やめた。」

「へ？」

「これってまるで吸血鬼じゃない！こっちがいいわ。」

グレルはポケットから赤いペンを取り出してレナータの洋服の下に除く白い肌突き付けた。

「レナータ・アルベルトは私にすべてをささげると誓いますか？」

「・・・はい。」

「グレル・サトクリフは彼の願いを叶えると誓いますか？・・・つて、はいよね。」

言い終わるとグレルはペンのふたを開ける。

「ちよつと上の服だけ脱いで。」

「え？」

「早く。」

「・・・はい。」

訳もわからないのにレナータは上着を脱ぎ、ワイシャツのボタンをはずす。

太陽に見せたことのないような真っ白い肌がのぞく。

「あら、綺麗な肌。」

「何をするんだ？」

「契約書を書くの。」

そういつてグレルは赤いペンでレナータの胸に契約書を交わしたことを現す模様を描く。

奇妙な感覚にくすぐったくて仕方ない。

「動かないで！」たまにグレルの言葉が飛ぶ。

模様を描き終わると後ろにいた葬儀屋が元の笑顔でグレルを見る。それに気づいてグレルも笑う。

「はい。終わり。これから、よろしくね。」

「・・・はい。」

「それじゃ、家に帰りましょう。」

また葬儀屋は言うつと先にすたすと歩いて行ってしまふ。

洋服を着るとレナータも急いで葬儀屋を追った。が、それはグレルに阻止された。

「一つ聞いてもいいかしら？」

「ん？」

「あなたが言った妹への罪滅ぼして今回のことだけじゃないでしょ？」

「・・・。」

「何を隠してるのかは聞かないけど、教えてくれないなら私も信用できないんだけど。」

真剣な目つきのグレル。

けど、レナータは口を固くつむって何も言おうとしない。

溜息をついてその手を離す。

「はあ……。葬儀屋には話したみたいけど。」

「これは僕と葬儀屋の問題だ。」

「葬儀屋も関係してるの？」

「つぐ……。黙れ。」

踵を返してレナータは走り去る。

グレルは冷たい視線で消える背中を見送るとゆっくりと笑った。

「なんて白い子純粹なのかしら。赤私で染めてあげたいわ。」

楽しそうにスキップをしながら二人の後を追っていくグレル。

レナータの走馬灯劇場シネマティックレコードのことを想像しながら嬉しそうに……。

契約（後書き）

死神との契約って何！？ってねW
W

手がかりなし（前書き）

手がかりありませんぜ

手がかりなし

目を開けるとそこは眩しい太陽が降り注ぐ自分の部屋だった。ベッドが一つに机が一つ。そして、たくさんの本棚が置かれている。本棚の中にはファイルや本がぎっしりと詰まっっていて床には入りきらなかったものが積んである。スリッパを履いてリビングへと移動する。ドアを開けるとそこには見たことのない黒髪のメガネ女がポットを持ってこちらを見ていた。

「のわぁ!?!」

「あら、おはようございます。」

しっかりとした口調で言う女からレナータは遠のき思わずリビングの扉を少し閉める。

女は首をちよつとかしげて近づこうとしてきた。

レナータは大声をあげてドアを閉めた。

「だ・・・誰です!?!なんで僕の家に!?!」

「ん?どうしたんですか?管理人さん。」

骨型クツキーを啜えながら葬儀屋が現れる。

ドア越しに見えた白銀の髪を見てレナータは口を開けたままで驚く。

「どうしたも・・・そいつはお前の友達なの!?!」

「・・・あの子って鈍感なの?」

「多分。」

「説明するんだ!」

「私よ。ワ・タ・シ。」

訳のわからないレナータの前でくるくると回転しながら女はどんどん姿を変えていった。

回転するのをやめた途端に目の前に現れたのはグレルだった。

「グレル？」

「そうよ。ったく……気付いてよ。」

「だって……僕……女苦手だから……よく見れなくて。」

「はぁ？女が苦手？？」

思わずずつと顔を近づけて聞いてしまう。

レナータは顔を少し引いて溜息をついて話し始めた。

「そうだよ。悪いね。」

「で……でも、妹がいるじゃないの！」

「……？」

「ヒッヒ……。」

意味深げに笑う葬儀屋に、首をかしげるレナータを見てグレルも首をかしげる。

「アイツは……男だけど。」

「……妹って……言ったじゃないのオオオ!!」

「だから！説明するから近いってばぁぁ!!」

近づくグレルを離して急いで葬儀屋のほうに隠れる。
腰の横から顔を出してまた話し始める。

「アイツは血縁関係はないんだ。」

「はぁ？」

「拾ったんだ。家の近くで徘徊してるのを心配して。女の子かと思つたら男で僕だつて一番最初びっくりしたよ。でも、本人は色々トラウマで自分が女だと思ひ込んでたから刺激を与えないようにそのままにしたんだ。だから、妹だつて言つてたんだ。」

「……訳わかんない。」
「僕だつて……わからないさ。」

葬儀屋の後ろで悲しそうな顔をするレナータ。
それをかばうかのように葬儀屋はレナータを隠す。

「と……とにかく、執事の格好するのはいいけど男にしてくれ！」
「はい。」

またくるくと回転すると今度は黒髪を下のほうで結つてメガネをかけた執事になった。
安心したように現れたレナータはおかしな顔をする。

「どうしたの？何か不満？」
「……赤毛はそのままにして。」
「なんで？」
「好きな色だから。」
「……。」

思わず目をぱちくりさせるグレルのことを無視してゆっくりと机の上の食べ物に目を落とす。
目玉焼き、食パン、コーンスープが置かれていた。

「作つたの？」
「ええ……まあ。」
「うまそう。葬儀屋も食べるでしょ？」

「小生も？」

「ああ。グレル。お前も一緒に食べよ。」

あまりにも突然のことで驚くグレルの前までレナータは歩いてくる。

「僕だつてすべてお前に賭けるつもりでいるわけ。だから、一緒に食べよ。」

「・・・そう。なら、あの事も・・・それは僕だけの判断で話せません。」

それだけ言うとすぐに席へと座る。葬儀屋はもう食べ始めていたけど。

「葬儀屋。食事の時くらい袖を捲くつたらどうだ！」

「ヒッヒ・・・厳しいですね。」

「普通だつてば！」

グレルは茫然としたまま二人を見ていた。

（マダム・レッドといた時だつて、ほかの奴らのところにいたときだつて・・・こんなに明るくなかった。）

「おい。食べないの？」

「え・・・ええ。食べるわ。もちろん。」

急いで葬儀屋の隣の椅子へと座った。

自分で作った料理の並ぶ机を見てフォークで食材を選ぶが、

「グレル。」

「ん、なに？」

「・・・まだ、いただきますをしてない。」

「なにそれ？」

「食事の前のあいさつ。ちゃんとするから待って。」

言われてしまつてグレルはゆっくりとフォークを置く。

レナータが手を合わせて言う。

「いただきます。」

「いただきます。」

「・・・いただきます。」

フォークを手にする葬儀屋達をみて一步遅れてグレルもフォークを手にする。

卵焼きを切りながらレナータはグレルに説明した。

「いい？どんな時でも食事をする時にはいただきます、ごちそうさまを言うこと。命を食べて生きているのにありがたみもなく食べてしまつたら最悪な奴になつちゃう。お前もすべての生き物に感謝してたほうがいいよ。人間にもね。」

「それって・・・殺しのこと？」

「・・・まあ、そうかな。」

「・・・はい。」

軽く返事を返してグレルは卵焼きの白身と黄身を綺麗に分けた。

食事が終わつてレナータは黒の中折り帽子をかぶり黒の上着を着ると葬儀屋とグレルを連れて殺人現場へと足を運ばせた。

警察の姿少なくいかにも後回しにされている感があった。

「ここで妹が死んだ。本当にお前が殺したんじゃないよな？」

グレルは向けられた視線を見返して首を縦に振った。
レナータは安心した面持ちで視線をそらすとまた悲しげな顔に戻って現場を見渡した。

「いったい誰なんだ？妹を殺したの。」

「見当はついてるけどどこにいるのかは知らないわ。」

静かに沈黙が流れる。

「どこにいるか知らないって・・・名前は？」

「・・・アロイス・トランシス。」

聞いたことのない名前にレナータは首をかしげた。

けど、グレルは首を横に振って先を歩きながら言った。

「彼にかかわらないほうがいいわよ。」

「・・・？」

不思議なことが渦巻く。

結末を知ってるの誰もいなく結局この日は何の回収もなかった。

手がかりなし（後書き）

疲れた

アロイスについて

「ねえ、クロード。つまんない……。」

退屈そうにスプーンでコーンスープをかき混ぜる一人の金髪の青年。豪華なテーブルに並べられた食べ物にそれほど手を付けずにただ、目の前のスープをかき混ぜる。

「何かしてよ。クロード。」

隣にいた執事のことを見上げて青年は口をとがらせる。

が、クロードと呼ばれた執事はピクリとも動かずただその場に立っているだけだ。

それにイラついたのか青年はスープに突っ込んでいたスプーンをわざと床へと落とす。

「あー、落ちちゃった。とってよ。クロード。」

嫌味たらしく言う青年。

クロードは表情一つ変えずにしゃがみ込むと少し濡れているスプーンを拾い上げようと手を伸ばす。

その時、青年が思いつきり靴のかかとでクロードの足を踏みつける。少し眉をひそめるクロードを見て楽しくなったのか、そのまま青年は力を込めた。

「なんか踏んじやってる？ごめん。気付かなかった。」

「……いいえ、大丈夫です。」

「っむ。そう……ならこんなのも平気だよね？」

青年は怒りもしないクロードにまた苛立ったのか、今度は頭を思いつきり踏みつける。

「クロードは何されても平気だよね？」

「アロイス坊ちやま。やめてください！」

ドアを開けてやってきた一人の片目の女はそう叫びながら青年に駆け寄る。

それが青年の気に障ったのか鋭い目つきでその女をにらみつける。

女は立ち止る。まるで蛇に睨まれた蛙のように……。

「ハンナは……。」

拳を震わせて青年はハンナと呼ばれた女にそれを突き付けた。

それはいい具合にハンナのおなかへと入っていき、めり込む。

痛さにハンナはその場に倒れこむ。すかさず青年はさっきクロードにしたように頭を踏みつける。

革製の靴でぐりぐりと踏み込む。

「ハンナは黙ってみてなよ。弱いくせにさ……何でしゃばってるの？」

「っう……。。」

踏みつけられて苦痛を隠しきれないハンナは下唇を強くかみつけて意識を分散させた。

アロイスはイライラをぶつけるようにもつと強く踏みつける。

それが彼にとっては快楽であるかのように……。その時、

「坊ちやま、お客様です。」

「・・・つまんないの。誰？」

ベルも鳴っていないのにクロードが声をかけた。またいらだたしげに、それでも服のしわを伸ばして出迎えの準備を整える。

床に伏していたハンナも急いで立ち上がり、埃を払うと急いで玄関へと行く。少しだけ唇から血が出ておりそれをペろりとなめとる。まあ、また出てくるけど。

アンティークのドアを開けるとそこに立っていたのは、一人の若い青年だった。

外はあいにくの雨で洋服はびしょびしょで体に吸いついて、なまめかしい。ほほから滴り落ちる水滴が首元を通って中へとはいっていく。

「すみません、レナータ・アルベルトと申します。迷子になっちゃって・・・できれば道を教えてほしいのですが・・・。」

青年・レナータは丁寧な口調でハンナに簡単な説明をする。

消え入りそうな声でハンナが返事を返そうとすると、アロイスがハンナを思いつきり横に突き飛ばす形でドアからどかした。

レナータは少し驚きつつも自分より頭一つ文小さな青年を見つめる。

「この雨ですし、もう日が暮れちゃってますから泊っていただくさいよ。」

「え？」

にこやかな作り笑いとやさしい言葉。

レナータは戸惑いを隠しきれない様子で返事に戸惑う。

雨の音が一層に激しく鳴ってレナータを駆り立てる。それを後押しするようにいつの間にか後ろにアロイスがいた。そして、背中を軽

く押すとレナータの体が吸い込まれるように屋敷の中へとおさまった。

「ようこそ、わが屋敷へ。」

何かアトラクションの案内係のような口調でアロイスは言う。レナータの手をとって、目の前の大きな階段を駆け上っていく。階段を急いで上がるもんだからレナータも急いで上がる。まだ、状況は把握しきれない様子だったが。

「クロード。彼をお風呂へ案内してあげて！」

アロイスが叫ぶとどこからかともなくクロードがメガネを直してやってきて「御意。」と言う。

何が起きているのかわからないままレナータはクロードの後をついていく。

「あ……いいんですか？大丈夫ですか？」

クロードの背中に尋ねると急に足が止まる。思わず前のめりになってレナータも止まるはめになった。

「……？」

首をかしげる。

すると、足元に回転台があるんじゃないかと思わせるほど素早く正確に方向を変えてクロードはずいっと寄ってくる。そして、レナータの手首をつかむと近くの部屋へと放り込んだ。

やはりわけのわからない状況に混乱するレナータをよそにクロードは壁に押し付ける。

「ちよ、何するんですか!？」

顔と顔の距離を近づけるクロードのメガネの奥の瞳は何かを見ていた。

そして、

「一緒に連れてきている者を出せ。」

わかりきった口調で言われて、レナータの目が大きく見開かれる。でも、不敵な笑みを浮かべて小さな笑いをもらす。次第に大きくなる声に重なって、レナータとは異なる笑い声が聞こえてくる。クロードは周りを少し見渡してみる。すると。

「こつちよ、イケメンさん。」

すぐ近くで聞こえて、クロードは少し眉を潜ませる。急いで周り歩きよるきよるしようとする赤いものが視界に入って横を向くとそこには・・・赤い奴が立っていた。

「もぉーレナータったら・・・知らない人についていっちゃだめでしょう?」

自分の唇に人差し指をあてて赤い奴はすこしぐれたような顔をする。レナータはあきれた様子で、

「早くして、グレル。」

とねだるように言った。

赤い奴　グレルはゆがんだ笑みを張り付けていつどこからか出した

のかわからないが・・・チェインソーを持っていた。これからのことを楽しむように唸るチェインソーをクロードへと振り落とす。ひらりと簡単にかわされても、振り向き際にまたチェインソーを向ける。

「葬儀屋は？」

さっきまで掴まれていた手首をさすりながらレナータはきよろきよろと周りを見渡す。

グレルはチェインソーを振り回しながら、回転音に負けない声で葬儀屋の居所を知らせる。

それは謎かけのようで、面白おかしく。

「人間が安らかに眠る場所はどこだ？」

レナータはグレルがいった言葉の意味を瞬時に理解して、ベッドへと目を向けるといつの間にかそこには銀色の髪をした傷だらけの男が座っていた。

にこにこほほ笑んで手をひらひらとこっちに振っている。

グレルと戦っているクロードは少し眉をひそめると勢いよく床を蹴りあげる。

そして、レナータのことを人質に取る。

「レナータ！」

「っ痛。」

「あなた方の主人のようですね・・・。手を出されなくなかったら下がっててください。」

低い声で警告されてグレルも葬儀屋もその場を動こうとしなかった。クロードはレナータの首元に光る銀食器の先をつきたてたまま後ろ

へとゆつくりと下がる。それに合わせて淡々な言葉が投げかけられる。

「こちら側に何の用があつていらしたのか、それをお答えください。」

「あんたがその人質の子の妹を殺した罪を問うためよ。」

グレルはちよつと呆れたように言う。近くの椅子へと腰を下ろす。その行動は主人を守るといふより、もう諦めたようにも見えてしまった。

でも、レナータも葬儀屋も平然と今までどおりの態度をふるまう。それがまた奇妙で奇妙で……。

「妹？」

「そうよ、妹さん。彼に似た目に髪の色は……たしか、黒髪だったわ。」

「知りません。そんな娘に興味はありません。」

「じゃ、貴方の主人はどうかしらね？」

その言葉にクロードは足を止めて眉間にしわを寄せた。

行動は行動を呼び、その行動に反応してまた行動が起こる。つまり僕が何を言いたいかといひますと、クロードの行動によってグレルがいつの間にかしこんでいた煙球を投げつけた。それを合図にレナータが逃げて、またまたそれを合図に葬儀屋がそばまで迎えに走って……ちよつとそこに現れたのが。

「アロイス・トランシー……。」

「騒がしいと思つたら鼠が二匹も部屋に入つてたんだ。」

わかりきつた柔和な笑みを張り付けてアロイスは近くにいたレナー

夕の腕を強く掴むと自分のほうへと引っ張り込んだ。そして、その唇にやさしく・・・強引に自分の唇を重ねた。

「っん!？」

驚きを隠せない三人と無表情のクロードの反応も無視してアロイスは続ける。

が、レナータにそれを拒まれて強制終了させられた。

「どうしたの？お嬢さん。」

「変態!」

「僕はお嬢さんにキスをしたまでだよ？挨拶じゃないか。」

おかしいことを当たり前のように。それが何を意味しているのか・・・よくわからなくてレナータは首をかしげた。
淡々とアロイスは説明をしてあげる。

「君の妹を殺したのは僕だよ。人に目撃させて、君を此処に案内するため。そして、君を僕のお姫様としてトランシー家に迎えてあげるの。」

「はぁ?」

やっぱり言っていることはわからない。

「どうしたの？そんなにうれしい?」

「やっぱり・・・お前が俺の妹を・・・。」

「弟の間違えでしょ？それに彼はもともとは僕が人身売買で買い取った子だよ。」

「・・・。」

次々にわかってしまう真実にレナータは立ちくらみがした。ふらつく足取りにそっとアロイスの手が添えられる。

「大丈夫ですか？お姫様。」

「妹が・・・お前に買われた？」

「そうだよ、彼を送り込んで仕組んだのも僕。」

だめだった。

完全にレナータは気を失った。

シヨックすぎて、怖すぎて・・・闇に閉ざされるように。

「レナータ！」

グレルが地を強く蹴りアロイスとの距離を縮める。が、その間にクロードが入ってきて止められてしまう。

ニコニコと笑いを張り付けたアロイスをみてグレルは苦虫をつぶしたような顔をする。縮めたくても縮められない距離をもどかしく思う。その間にアロイスとレナータは部屋から逃げてどこかへいく。葬儀屋がグレルとクロードの間を縫ってレナータを奪い返す。

「ヒッヒヒヒ。小生のお姫様に手を出すなんて・・・。」

そこで言葉を止めてぎゅっとレナータを抱きしめる。

きつと髪の毛の奥で瞳が光った。アロイスは少しだけひるむ。

「それじゃ。」

そういうとニコリと笑って姿を消してしまう。

クロードと接近戦を繰り返していたグレルは間を急激に広げると入ってきた窓へと走った。

「じゃーね、ハンサムさんw」

馬鹿にするような声を響かせて月明かりの中消えていった。
アロイスは盛大な溜息をついてから口をとがらせた。

「まったく、僕のお姫様になんで死神がくっついてるのさ……。」

「坊ちゃん、追いますか？」

「いいよ。また今度僕から会いに行くから。」

アロイスは口元を優しく触ってにこりと笑う。

「待っててね。僕のお姫様。」

知るための鍵（前書き）

フィクションです

知るための鍵

あの日から、部屋に閉じこもったままのレナータ。グレルも、葬儀屋も何も言わないけどただ……。

「ねえ、何回お風呂に入れば気が済むの!？」

「……うるさいな。」

一日に四回もレナータはお風呂に入っては、いたるところを洗うけど、その理由はわかりきっている。

「そりゃ、弟が人身売買にいたなんてね。水に流したいわね。」

「うまいこと言わなくていいから。」

風呂の中からレナータが叫ぶ。

グレルは少しだけ溜息をついてドアを勢いよくあける。

白い体が煙に隠れて見え、花のにおいが微かに香った。

「だぁぁぁぁぁ!！」

「もぉー、うるさいわね。一人でお風呂独占なんてずるいわよ。」

「だ、だからって、は、入ってくるなよ!！」

グレルは躊躇なくお風呂に入ってくると、レナータの隣に腰を下ろした。

そして、シャンプーを手にとってレナータの髪をわしゃわしゃと洗い始める。

「気にしないほうがいいんじゃない?死人はしゃべらないわ。」

「し、知ってるよ。けど……。」

「ヒツヒツヒ。死人に口無しですね。」

いつの間にかやってきた葬儀屋に声を上げずにレナータは驚く。でも、諦めたようにシャワーで髪の毛の泡を綺麗に流す。

「もう、気にしすぎなんじゃない？」

「何年も一緒にいた弟だぞ。いまさら他人事なんて……。」

「おや？火葬するとき気が付いていたと思ったのですが……。」
「はあ？」

何を言ってるんだと言わんばかりにレナータが声を上げる。

ドアのところに寄りかかっていた葬儀屋はわかりきったような笑みを浮かべた。

「弟さんのおめかしをしてる時に、鎖骨のところには何かの焼き印が入っていましたよ。」

「……それを何で言わない！」

思わず泡を流しきる前に叫ぶ。

葬儀屋は先ほどと同じ笑いを上げて先にお湯につかる。

グレルはっていつとただ事実を受け止めて自分の真っ赤な髪の毛も洗い始めた。

「先にかかる。」

「あ、ちよつと待ってよ！」

「いいよ。二人で仲良く入ってなよ。」

強く閉められたドアからレナータの怒りを感じ、二人は少しだけ押し黙る。

でも、先にそれを破ったのはグレルだった。

「あんだ、最初から知ってたの？」

「ヒツヒツヒ。」

葬儀屋は笑うばかりで何も言わない。

別に問いただすようなまねをグレルはしないけど、すこし不満げな様子。

さっさとシャワーで泡を取ると何も言わずに風呂を後にした。

「ねえ、レナータ。」

髪の毛の水分を取りながらグレルがリビングへと向かう。

けど、その言葉も息も一時的に止められた。

目の前にいる黒い忠犬によって……。

「せ、セバスチャン。」

腰にバスタオルを巻いただけのレナータの腕を掴むセバスチャン・ミカエリス。

その横にたたずむ小さな青年・シエル・ファントムハイブ。

その二つの存在にグレルは身動きが取れず、ただ固まるだけであった。

「あの、どちら様ですか？」

一方のレナータは驚きを見せつつも冷静に質問を投げかける。自分の状況が本当に分かっているのだろうか？

「これは失礼した。レナータ嬢。」

恭しくお辞儀をするシエル。
セバスチャンも手を離してちゃんとお辞儀をする。
その間にグレルのところに戻りつつレナータは不機嫌そうな顔を
する。

「レナータ嬢？俺は男だ。」

「君はある時を持ってレナータ嬢となったのだよ。」

「・・・？悪い。何を言ってるんだ？」

首を懸命にかしげるレナータ。

いきなり来た人の説明にも、質問にも答えてもらえないのに展開だ
けは早い。

「君の両親は君の妹さんが・・・いや、弟が生きている時まで生存
していた。」

「両親が生きてた？二人とも俺を産んで死んだ。そうだろ？葬儀屋。」

シエルの淡々とした説明を止め、確認をするレナータ。

その瞳に不安の色が浮かぶ。

葬儀屋は前髪の奥の瞳をどこに向けたのか分からないが、返事を返
そうとはしなかった。

レナータの不安の色は募る。

「とにかく、その両親が死ぬ一週間前に君の戸籍を男から女へと変
換させた。」

「待って！何が？なんで、俺の両親が生きてて戸籍を変えて死んだ
？」

聞きたいことがいっぱいある。

次々にレナータの口から質問があふれ出る。

「なんで、葬儀屋は答えない!?!」

「……。」

「おい!」

レナータは葬儀屋の胸ぐらを精一杯掴んで下に引っ張った。

「ちょ、やめなさいよ!」

「グレルには関係ない!」

止めようとするグレルの手をこともなげにレナータは振り払う。
グレルは少し身を引きさみしげな瞳を向けた。

「おい、なんで……なんで黙ってた?」

「……小生は契約に従ったまで。」

ゆっくり葬儀屋はお辞儀をするとそっと口元を釣り上げた。
それが、レナータの気に触れる。

「っ痛。」

軽い破裂音に似た音が部屋に響く。

葬儀屋のほっぺが軽く赤くなる。

同時にレナータの瞳も赤くはれるくらいの涙があふれ出す。

「葬儀屋なんて、嫌いだ。」

走り去るレナータ。

沈黙が数秒流れる。

「・・・で、彼の戸籍は何故変えられたのかな？」

ほっぺをさすりながら葬儀屋は真剣な声を出す。

ちよつとそれがめつたにないことだったからシエルは戸惑った。
が、いつも通りに話します。

「アロイス・トランシーは知っているな？」

「ええ、もちろん。」

「彼がレナータ嬢のことを暗殺しようとしていた。それを彼の弟が
変わりに死んだ。」

「なぜ？」

「アロイスにとっては男のレナータに興味はない。だから、殺そう
とした。それを、弟であったアンリーヌが止めようと自分の死を選
んだ。」

淡々としたシエルの説明を、表情一つ変えずに葬儀屋は聞く。

「ちよつと待つてよ。なんで、レナータが殺されないといけなかつ
たの？」

そこに口をはさんだグレルは最大の疑問を投げかける。

シエルは一度息を深く吸い込むと、ゆっくりと吐きだした。

「彼は最大のカギを握っているんだ。」

「鍵つて・・・なんの？」

そうグレルが尋ねると、シエルはそつと外を見つめてただ真実を吐
きだした。

「悪魔や死神のことを知る鍵だ。」

知るための鍵（後書き）

戸籍の問題ってあるよね。

MY Princess (前書き)

フィクションです

My Princess

シエルの言った言葉がレナータの頭をくるくると回る。

「いきなり女だって言われたって・・・しらねえ。」

小さく縮こまって自分の体を包み隠してしまいたいくらいに、ぎゅっと膝を抱きしめるレナータ。

自分が一体どんな状況に置かれているのかわからない。

死んだと思ってた親は生きてた。裏切られたと思った弟は裏切ってなかった。男だと思ってた自分が急に女へとなって、殺されるはずだったのに嫁にされそうになる。

「何が起きてるんだよ・・・。」

「私が説明してあげようか？」

なまめかしい女っぽい声。

驚いて姿を確認する前にレナータはベッドの端へと逃げ込む。

ドアのところどころか遠くを見つめている赤髪のオカマ、グレルはゆっくりとレナータに近づいた。

「グレル、なんで此処に？」

「葬儀屋が言ったからじゃないわよ。私の意思で来たの。」

疑われたことに少しだけ不貞腐れた顔でグレルは言うと、ベッドにより隅に腰をおろす。

レナータのおびえた瞳を見て心に抱いた言葉すべてを一言に詰め込んだ。

「大丈夫よ、私が守る。」

それがどれほどまでにレナータに取って頼りになるかは彼次第だけど、この時確かに彼は泣いた。

「ちよ、レナータ？」

「・・・グレル、俺、どうしたらいいの？」

「今は情報整理ってとこね。でも、アロイスはきつとあなたを狙いに来る。だから、私が守る。」

「何故？グレルには関係ないだろ！？」

巻き込みたくない一心からなのかレナータは激情した声を出す。理由など簡単だ。グレルはその意味も込めて答えを返した。

「契約したでしょ？」

「・・・はは、それだけで、命も捧げるのか？」

「もちろん、契約ですもの。」

グレルはベッドから腰を上げると部屋の絨毯の上で膝まづく。そして、レナータの手をそっととり優しく笑みを張り付ける。

「えっと、い、いえすまいるーどだっけ？」

「・・・ちよっと、人のをまねするなよ。」

「あら、よくわかったわね。」

「・・・あれ、なんでだろう？」

「でも、マネしなきゃいいのじゃないの！」

「俺に怒るな！」

不貞腐れる二人。

ちよっとだけ気まずい沈黙が流れてしまう。

けど、グレルが思い出したようにつぶやく。

「Yes, My Princess.」

「え、な、何それ？」

「私の王女様ってこと。王女様の命令は絶対。」

「・・・結局俺は女扱いかよ。」

「もーいじけないの。」

「・・・はいはい。」

グレルが何を言おうとレナータは不貞腐れる。

でも、どこか心の底では喜んでるのだろうか？小さな笑みを張り付けていた。

「ねえ、葬儀屋のことなんだけど・・・。」

「あいつはもう嫌いだ。」

話をすんなりと切り替えようとしたグレル。だが、レナータには通用しない。

余計不貞腐れた顔でそっぽを向いてしまい話を聞こうともしていない。

グレルはベッドに乗りなおしてレナータに近づく。

「ちよつと話だけでもいいじゃない。」

「なんで？あいつは何も話してくれなかった。」

「それは、なにか事情でもあるんじゃない？」

「育ての親に近いあいつが俺に何を隠してるんだよ!？」

「ちよ、落ち着いて。」

グレルの手がレナータのことを必死に止める。

けど、暴れるレナータ。

「もー、暴れないで！」

「離せ！！！」

「待て！」

飼い主のようにレナータの首根っこを掴んだ。

宙ぶらりんになったから動くとはどんどん首が閉まる。

「わかったから落ち着いて。いい？」

「・・・うん。」

「今晚アロイス・トランシーのところにセバスチャンたちと行く。」

「な、なんで!?!」

「知りたくないの？何故、貴方の家族が全員殺されたのか。」

不思議そうに首をかしげるグレルに「確かに。」と納得顔になるレナータ。

そっとベッドにおろし、グレルはこれからのことを続けた。

「ダンスパーティーに呼ばれたシエルと一緒に行って。私はあとから行くから。」

「え、いま守ってくれるって言ったじゃん。」

「わかってるわよ。けど、一つしなきゃいけないことがあるから。」

「へえー。」

「セバスチャンがいるから大丈夫よ。」

ちよつといじけるレナータの頭をなでてグレルは言っと、ベッドから腰を上げた。

「さて、それじゃがんばってね。」

「・・・ああ。」

「女の子らしくエスコートしてもらいなさい。」

ちよつと嫌味っぽくいうとグレルはひらひらと手を振って部屋を後にした。

と、入れ替わりにセバスチャンが部屋へと入ってくる。

軽くお辞儀をしてにつこりと笑う。

「・・・で、何しに来たの？」

「注意事項をいくつか申し上げたいと思ひまして。」

恭しい笑顔が少しだけレナータをイラつかせる。

けど、冷静を保って落ち着いた声で少し抑え気味なつた声が出た。

「なんですか？」

「簡単なことです、坊っちゃんに協力してください。」

「協力つて・・・何を？」

首をかしげるレナータ。

セバスチャンはゆっくりと近づいてきてベッドの上のレナータを見下ろす。

そして、耳元まで顔を近づけてなまめかしい声を発する。

「女としてふるまっていたきたい。」

すつと自分の身を引いてレナータはセバスチャンを驚きの目で見上げた。

どこか冷ややかな目で、冷たいと感じる。

けど、セバスチャンはまた笑顔を浮かべた。

「それだけです。」

「・・・わかった。なら、俺にも協力しろ。」

ちよつとだけセバスチャンがいぶかしげに眉をひそめた。
でも、笑顔を作りなおして首だけをかしげる。

「グレルが来るまで、俺を守れ。」

「・・・御意。」

「あれ？イエス、まいろーどつて言わないんだ。」

「それは坊ちゃまだけです。さて、着替えていただきましようか。」

話をそらすようにセバスチャンはどこからともなく綺麗なドレスを
持ちだした。

驚いたけど、まあ、突っ込まないのがレナータの癖？つてものかな。

「・・・着方がわからない。」

「では、お手伝いさせて頂きます。」

セバスチャンは慣れた手つきでYシャツのボタンをはずす。

そして、最初に着る服を手渡してやったりとちよつとしたことを手
伝う。

「ねえ、セバスチャンはシエルの執事なのか？」

「ええ、そうです。」

「シエルってビターラビットを作った、ファントムハイヴ家の当主
なんだろう？」

「そうでございます。」

「13歳で当主なんて・・・きつとつらいだろうな。」

セバスチャンがドレスを手渡す途中、首をかしげる。

「何故です？」

珍しくした質問。

レナータはドレスをかぶり袖に手を通しながらもごもごと口を動かす。

「だって、親にも甘えずに強くずっしりと！それが当主だけど、13歳なんて・・・何かがあつて乗り越えたって証拠じゃないかな？俺はそう思う。」

真っ白なウエディングドレスを思わせるドレスから顔を出して、後ろを振り返る。

背中から腰にかけてのくびれが何故か女と思わせてしまう。

「セバスチャン、背中ファスナー頼める？」

「御意。」

しばしその姿に見とれていたのかセバスチャンは我に返って、ファスナーへと手をかける。

下から上へと素直に閉まるファスナー。

男がそんな余裕できてしまえるものなのだろうか？

「セバスチャンは、いつからシエルの執事に？」

「・・・忘れました。」

「はは、執事でもそんなことがあるのか。」

「グレル・サトクリフとはどういう関係で？」

そつと足に靴を滑り込ませながら尋ねた。

下を向いていたからセバスチャンはわからなかった。けど、確かにその時レナータは幼い子供のようにクスツとわらった。足が笑うよ

うに揺れていた。

「女王様と家庭教師かな。」

新しいおもちゃを買ってもらえる前の子供のような顔。

わくわくした気持ちを抑えられずに、顔全体で表現している。

セバスチャンはもう片方の靴をはかせて、そっと笑みを張り付けながら手を差し出した。

「では、女王様。お手をどうぞ。」

そばに置かれた銀色のストレートのかつらを手に取り、レナータはその中に自分の髪をしまい込んだ。

男だった自分をしまい込むかのように丁寧に丁寧に。

そして、本当の自分をしまい終わるとそっと外をみる。

日が沈み月が昇り、窓ガラスに移された自分をじっとみつめた。

が、決心をきめるように背筋をピンっと伸ばしておしとやかな笑みを張り付ける。

まるで外国のお人形を思わせるような笑み。

「では、まいりましょうか。」

細く白い手をセバスチャンの手に重ねる。

綺麗に一歩一歩踏み込み、部屋を後にした。

では、パーティーへ。

「いたっ！」

「ヒールは高いですから、気をつけてください。」

「……女としてめんどくせーな。」

MY Princess (後書き)

YES、My Princess .

って・・・なんかネーミングセンスがない！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8956n/>

真っ赤に染めて

2011年11月13日17時13分発行